
あの子は七代目

陸ヒデト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの子は七代目

【Zコード】

Z2625E

【作者名】

陸ヒゲト

【あらすじ】

「一般的な高校生、藤井智哉。ある日、チンピラに絡まれていた智哉を一人の少女、上原加奈子が助ける。学校で再会した二人だったが、どういうわけか智哉は加奈子の舍弟になることに。この日を境に、智哉の平凡なはずの人生の歯車が少しずつ狂っていく……。

第一話・最”凶”な彼女との出会い

その日、僕、藤井智哉の朝は最悪だった。

どういうわけか目覚ましが鳴らず、起きたのは遅刻寸前という時間帯。慌てて着替えている最中に足をタンスの角にぶつけ、そのまま転んで床に額で挨拶してしまった。さらにとどめと言わんばかりに、出かける寸前になつて自転車のパンク。こうも不運が重なると人間笑いしか出でこなくなる。

そんなこんなで、僕は全速力で学校までの道のりを走っていた。僕の通っている高校は規律に厳しく、遅刻をしようものなら課題が山とだされる。何がなんでも遅刻するわけにはいかないのだ。

僕の目の前に曲がり角が見えてきた。

そこを曲がれば学校までの近道がある。

このままならギリギリで到着できるだろう。僕はペースを速め、一気に角を曲がった。その時、突然視界の端から人影が現れた。急ブレーキも間に合わず、二人は地面に投げ出される。地面に着くまでの一瞬の間、僕の脳裏には今朝、つけっぱなしだったテレビから聞こえてきた、女子アナウンサーの声が浮かんだ。

今日の一位は双子座、素敵な出会いがあるかも。ラッキーカラーは白です

もしこれがベタな恋愛ものでよくある出会いの一場面であれば、占いも捨てたものではない。すぐに体を起こし、相手のもとへ駆け寄ろうとした。

「なにするんじゃい！　このガキやあー！」

前言撤回。占いなんか一度と信じない。そう僕は心に決めた。

「すいません！　すいません！」

僕は半泣きになりながら平謝りをすることしかできない。男の怒声はそれでも続いている。

「誠意が伝わらんのぉ？　しつちこじこや！」

男は僕の制服の襟首をつかむ。僕はこの時初めて、『命の危機』といつもの実感した。

涙でかすんでいく視界の中、横に一台の車が止まる。黒光りした車体は重厚感が漂い、明らかに辺りにある車とは異質のものに思えた。

やがて後部座席のドアが開き、中からスースを着たガタイのよい男が一人、その間に僕と同じくらいの歳をした女の子が一人降りてきた。そして、その子は開口一番、男に向かつて言つ。

「大の大人が、子供相手にしかケンカ売れないなんて、情けないねえ」

「この小娘が！　もうこいつへん言つてみい！！」

「何度も言つてやるよ。子供しか相手できない小さい野郎だつて男は顔を真つ赤にして怒つている。つかんでいた襟を離すと、その子に向かつて拳を振り上げようとした。

しかし、その子の横についていた一人の男が前に一歩進み出ると、

男は立ち止まつた。静かな迫力を含んだ無言の重圧が男にのしかかる。やがて、男は振り上げた拳を戻すと、僕と女の子の顔を見て、舌打ちをしてその場から去つていった。

男がいなくなつたのを見ると、その子は「あんたも気をつけなよ」と言つて再び車に乗り込んだ。啞然とした表情を浮かべながら、僕は走り去つていく車を見つめる。その耳には小さくなつていくエンジン音と、遠くのほうから聞こえる学校のチャイムが混ざつて響いていた。

「藤井、遅刻だ。あとで職員室へ来い」

校門で待ち構えていた先生にそう言われ、肩を落としながら僕は2-Aの教室に向かつた。

これまでおとなしい優等生で通してきた僕だが、今回の遅刻でイメージは崩れ、不真面目な生徒という印象を与えてしまったかもしれない。もしかしたら今日からあだ名が「遅刻した人」になつてしまふのではないか。

そんな変なことを考えながら僕は教室のドアを開けた。教室中の視線が一斉にこちらに注がれる。どうやら先生のありがたいお話の中だったようで、僕は足早に自分の席である一番後ろの窓側の席に向かつて歩きだした。が、教室に何か違和感を感じ、はたと足を止めた。

「ああ、彼女は今日家の事情で転校してきた、上原佳奈子さんだ。これから仲良くしてやってくれ」

昨日までは何も無かつた僕の机の横にもう一つ机があり、そこに女子が一人座っていたのだ。

僕はその子の顔をちらりと見る。女の子は頬杖をつき、窓の外を見ていたので、顔はよく見えなかつたが、深く考えないことにした。転校生の顔よりも遅刻の言い訳を考えることで僕の頭はいっぱいだつたからだ。

ホームルームが終わり、教室が一斉に騒がしくなつた。脳内会議の結果、遅刻の言い訳を、不良に絡まれて自転車は盗まれた、額の傷はそのときに殴られたことに決定した。あながち間違つた言い訳でもない。実際自転車はパンクしたのだが、盗まれたと言つておけば罰が軽くなるかもしれないと考えたのだ。

いざ職員室へ行こうとすると、とっくに僕の頭から消えかけていた転校生に声をかけられた。

「ねえ、ちょっとあんた

「えつ……何?」

「助けてやつたのに、礼の一つもないの?」

この子なに言つてんだ? なんで今田転校してきたばかりの人にはんなことをいわれなければならないんだ。僕には全く想像もつかない。

「まったく……このあたし顔を忘れるなんていい度胸ね

依然として僕には何のことかさっぱり分からない。どうせ人違いだろ?と思ひ、少しめんどくさそうに

「以前お会いしたことがありましたつけ?」
てみた。

「あんた、もしかしてケンカ売つてんの？ 今日の朝！ あんたが登校してるときに何があつたか思い出してみな！」

彼女は少し強い口調で言い放つ。

今日の朝……。

僕の顔からどんどん血の気が引いていくのがわかる。そして己の鈍感さを呪つた。

「まやか……あのときの……」

「よつやく思い出した？ まったく……今の今まで忘れてたなんて、薄情にもほどがあるわね。あんたがチンピラに絡まれてるところを助けてあげたのはこのあたしよ」「よ

僕は驚きで何を喋ればよいか分からず、ただ酸素を求める魚のようになに口をパクパクさせてくると、加奈子はしうがないなといったふうに

「あんた、職員室に行くんでしょ。私も行くといひなの。ところがけだから、行くよ。遅刻した人」

と言つて、僕の袖を引っ張つて歩きだした。

「あんた、遅刻の言い訳しに行くつもりなんでしょう？」

佳奈子はお見通しだとこつのように僕に問いかけた。

「まあまあ……そうだよ……」

僕は心の内を見透かされたことに苦笑にする。加奈子はより強く智哉の腕を引っ張り、ぶつきらぼうなノックを一つして職員室に入った。

「藤井、こっちだ」

職員室に入るなり声をかけたのは、体育教師兼生徒指導の先生だった。肩をすばめながらとぼとぼと僕はその先生のもとへと向かう。僕はあまりこの先生が得意ではない。学園ドラマに出てくるような『いかにも』といった体つきをした先生に、僕は内心びびっている。そして、説教が長いこともその理由になっていた。

先生は眉間にしわを寄せ、僕の顔を見る。蛇に睨まれた蛙のごとく、僕は身動きが取れなかつた。

「藤井、お前は今日が初遅刻だから大目に見てやるけどな、これがもし社会人だつたときのことを考えてみる」

「は、はあ……」

また始まつたよ……。話したら生徒の言つことなんか聞かないからな、この先生は。僕は言い訳を話すタイミングを完璧に逃したことには激しく後悔した。状況は最悪。先生の無駄に長いお説教を聞かされようとしているの。僕はばれないように小さく溜息を吐いた。

先生の話を止め、本当のことを言おうか。でも、チンピラに絡まっていたところを女の子に助けられた、なんてこの先生に信じてもらえるか疑問だ。

「おい、聞いてるのか？」

「は、はい……」

でも、このまま黙つてこの場に立つていいわけだ。先生が一息ついたのを見計らつて、僕は口を開いた。

「あの、実はですね」

「藤井君が遅刻したのは、私を助けてくれたからなんです」

そう言つたのは今まで隣で様子を伺つていた加奈子だった。

「藤井君は私がチンピラに絡まれていたところを助けてくれたんです。私を先に逃がして、チンピラから守つてくれたんですね！」

突然のことでの先生は驚いている。しかし、もつと驚いてるのは僕のほうだ。自分でも気づかぬうちに口をポカンと開けて加奈子を見ていた。さつきまでの人を小ばかにした態度とはまるで別人だ。ここまで自分を変えられる人間を僕は今まで見たことがない。

「や、そつか。それなら仕方ないな。藤井、よくやつたな。課題は出さないでおいてやるから、もう遅刻するなよ」

たつた数十秒の内にじつやら事態は丸く収まつたようだ。戸惑いと混乱を抱えて、僕は職員室を出た。

「また私のおかげで助かったわね」

背後から加奈子の声が聞こえた。その声の調子から、ここに来る前の加奈子であることがわかる。振り返ると加奈子が右手にプリントを数枚持つて職員室のドアを閉めていた。多分、用事とはこのことだつたのだろう。

「別に頼んだわけじゃないじゃないだろ。ちやんと理由は考えてたの」「で

「チンピラに絡まれて自転車を盗られました、なんてあの先生がすんなりと信じると思う? 私が代わりに言つてあげたから課題も出されずにすんだのよ」

僕は反論することができなかつた。加奈子に言い訳の内容は話してないのに、どうしていつも人の考えを読むのがうまいのだろう。

「とりあえず、お礼は言つとくよ。ありがと」

このままでは僕の考えがすべて読まれてしまうかもしれない。そんな超能力者みたいな人間と一緒にいられない。そうなる前に早めに加奈子から逃げだそう。僕は疲れきった表情で、肩を落としながら教室へ戻ろうとした。

しかし、その僕の肩をつかみ、無理やり引き上げようとする人物が一人、僕の背後にいた。

「ちよつとーーーいつも借りがあつてありがとうだけじゃ割に合わないじやない

「じゃあ、僕にどうじぶんなんだよ?」

どうせ飯をおこれとかジュース買つてきてといつたものだろ。転校してきたばかりの人間に言われることではないが、今回は仕方がない。そんなことを思つていた僕だったが、次の瞬間、加奈子の口から出てきた言葉に呆然としてしまつた。

「私の”舍弟”になりなさい！」

「……今、なんて言った？」

「舍弟になれて言つたのよ」

舍弟ってあれだよね。子分つてことだよね。

加奈子の表情から察するに、どうやら[冗談なんかではなくさうだ。
僕に反論する機会も与えず、加奈子は上機嫌で教室まで歩き出した。

そんな加奈子の背中を呆然と見てている僕の頭の中では、再び今朝の
アナウンサーの声が、何度もリフレインしているのだつた。

第一話・最”凶”な彼女との出会い（後書き）

この作品は三人の作者によるリレー小説式の書き方をしています。文体などに違いが見られるかも知れませが、ご了承ください。作品に対しての感想やアドバイスなども書き込んでいただければ幸いです。おもしろい作品が書けるよう努力いたしますので、よろしくおねがいします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2625e/>

あの子は七代目

2010年10月12日03時14分発行